

看護学部 2024 年度ティーチングポートフォリオ

氏名	所属領域	職位
檜原理恵	基礎看護学	教 授
佐久間佐織	基礎看護学	教 授
炭谷正太郎	基礎看護学	准教授
吉里心希	基礎看護学	助 教
早川ゆかり	基礎看護学	助 教
有村優範	基礎看護学	助 教
橋積亜希子	基礎看護学	助 教
大石ふみ子	成人看護学（急性期）	教 授
藤浪千種	成人看護学（急性期）	教 授
乾友紀	成人看護学（急性期）	准教授
寺田康祐	成人看護学（急性期）	助 教
和田由樹	成人看護学（慢性期）	教 授
水島史乃	成人看護学（慢性期）	准教授
河野貴大	成人看護学（慢性期）	助 教
山崎淑恵	成人看護学（慢性期）	助 教
長山有香理	成人看護学（慢性期）	助 教
山田紀代美	老年看護学	教 授
渡邊昌子	老年看護学	教 授
木村暢男	老年看護学	准教授
内藤智義	老年看護学	准教授
加藤貴子	老年看護学	助 教
藤本栄子	母性看護学	教 授
神崎江利子	母性看護学	准教授
室加千佳	母性看護学	准教授
村松美恵	母性看護学	助 教
宮谷恵	小児看護学	教 授
小出扶美子	小児看護学	准教授
山本智子	小児看護学	助 教
入江拓	精神看護学	教 授
清水隆裕	精神看護学	教 授
小平朋江	精神看護学	准教授
松本有希	精神看護学	助 教
山村江美子	在宅看護学	教 授
岩瀬美保	在宅看護学	助 教

江口晶子	公衆衛生看護学	教 授
長山ひかる	公衆衛生看護学	助 教
遠山大成	公衆衛生看護学	助 教
長峰伸治	養護教諭課程	教 授
安田智洋	教養・専門基礎	教 授
熊澤武志	教養・専門基礎	教 授
西川浩昭	教養・専門基礎	教 授
隆朋也	教養・専門基礎	講 師
渥美陽子	教養・専門基礎	助 教

氏名 榎原 理恵

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護学原論Ⅰ（Aclass）	83	看護学原論Ⅰ（Bclass）	83
看護管理論Ⅱ	61	看護学原論Ⅱ（Aclass）	84
看護学原論Ⅱ（Bclass）	83		

2. 理念

看護はあらゆる感性が必要になると思っています。人によってイメージが異なると思いますが、対象から求められる看護職人材でありたいと思います。

3. 方法

初学者である学生さんが、看護に興味を持つこと、学修する態度を形成することを目的に、講義内でミニテストを課すとともにディスカッションを取り入れています。また、反転授業やディベートを通して自らの思考を言語化し、他者に伝える力を身につけてもらいます。

4. 成果

学生さんからの評価はおおむね良好ですが、知識の獲得が難しい結果となっています。

5. 改善

ミニテストのフィードバックをより丁寧に行い、知識の獲得がスムーズになるように努めます。

6. 教育活動

アドバイザー、サークルの顧問は持っていません。

氏名 佐久間 佐織

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
基礎看護技術Ⅲ	157	看護研究	156
基礎看護学実習Ⅰ	166		

2. 理念

『自ら考えて行動できる看護専門職者の育成』

聖隷クリストファー大学看護学部教育目標では、「人間や環境についての基礎知識を幅広い視野から体系的に修得する能力を育成する」ことが挙げられています。また、卒業認定・学位授与の方針（DP）では、「様々な価値観や立場、意見を尊重した対人関係能力と論理的表現力を身につけている」「看護専門分野や諸学の学識を用いて課題を探究し、多面的に考察することができる」とあります。

所属する基礎看護学領域では、看護の基本的な知識と技術の習得を目的とした科目が設定されています。看護専門職は、知識や技術をもとに自ら考えて判断し、行動することが求められます。そのため、私は、学生が看護の基礎的な知識や技術を、「クリティカルな思考」で、「自ら課題を探究できる」こと、そして、「学ぶことを楽しめる」ことを大切にしています。「自ら考え行動できる力」は、短期間で身につくものではありません。日ごろの授業や演習、実習から主体的に考え、積極的に行動することができるよう、支援していきたいと思っています。

私が、学生に求めることは、「誠実さ」です。

3. 方法

基礎看護技術Ⅲ：

この科目はフィジカルアセスメント、看護過程を学修します。人体の構造と機能、病態や症候などの知識が前提となるため、学生がこれらの知識を想起して知識を積み重ねられるよう、事前課題、事後課題を設定しました。課題は、自分の頭を整理できるよう手書きとし、毎回教員がコメント、評価を記載してフィードバックしました。

看護研究：

研究の意義とプロセスについて具体的に理解してもらえよう、説明の際には例示を多く取り入れました。4年次の卒業研究ゼミナールをふまえ、自分の関心のある領域やテーマに合わせてグループを編成し文献検討に取り組めるようにしました。

基礎看護学実習Ⅰ：

学内でのオリエンテーションでは、臨床に出るための心構えや事前学修、誠実さが必要であることを意識して説明しました。実習施設への通学に無理が生じないよう、事前に通学時間や病院アルバイ

トなどについてアンケートを実施し、可能な範囲で調整しました。また、実習についての不安や懸念事項について、個別に面談する機会を設けました。

実習での指導については、教員間、臨床指導者と目標や指導方法・内容について共通認識できるよう、実習指導要領を作成しました。また、実習目標ごとのルーブリックを作成し、学生と実習の到達度を共有できるようにしました。

4. 成果

基礎看護技術Ⅲ：

今年度、授業評価は実施していませんが、平均 GPA は昨年度より上昇していました。

看護研究：

自分の関心のある領域やテーマについて能動的に考え、学修できていたように思います。成績評価は、レポートが中心であり、ほとんどの学生が真面目に取り組み提出しており、平均 GPA は昨年度よりも上昇しました。今年度、授業評価は実施していません。

基礎看護学実習Ⅰ：

平均 GPA は昨年度のデータがなく比較できませんが、良い結果でした。授業評価は、昨年度と比較すると「大変良かった」が減少し、「良かった」が増加する傾向がありましたが、おおむねよいという評価でした。はじめての臨床での看護実践に参加することは緊張も高かったと思いますが、貴重な学びができていたと思います。自由記述では、教員や臨床指導者の指導や支援が温かく、安心したという意見が多くありました。しかし、個人や実習施設の情報管理について問題となる出来事もあり、改善が必要だと痛感しています。

5. 改善

基礎看護技術Ⅲ：

知識を確認するテストや課題では回答できることも、実践として活用できない場面が多くみられました。学修したことをどのように使い、判断するのか、を結び付けられるような工夫が必要だと考えます。

看護研究：

看護研究に対して、難しいイメージではなく、興味・関心を持てるよう継続していきます。

基礎看護学実習Ⅰ：

学生が安心して学修できるような実習体制を整えることはできましたが、個人や実習施設の情報管理について問題となる出来事があり、実習準備段階での学生への指導方法を改善する必要があります。普段の授業から、撮影することについてのメリットとリスクを考えて行動するよう指導すること、オリエンテーションでは、何のためにするのか、実行しないとどのようなリスクがあるのかをもっと具体的に説明するようにしていきます。

6. 教育活動

アドバイザー 主担当 17 名（1 年生 6 名、2 年生 4 名、3 年生 3 名、4 年生 4 名）

学生 FD スタッフの活動の支援

担当した科目）

基礎看護技術Ⅰ、基礎看護技術Ⅱ、基礎看護技術Ⅳ、基礎看護学実習Ⅱ、看護研究Ⅱ

氏名 炭谷 正太郎

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（基礎看護学）	2	基礎看護学実習Ⅱ	158
基礎看護技術Ⅳ	155		

2. 理念

私は本学の看護学部を卒業し、精神科と救命救急センターの看護師として勤めたあと、本学の大学院（博士前期、後期課程）を修了しました。

基礎看護学領域の教員として、患者に貢献するための基本的な看護技術を学ぶ講義、演習、実習を担当しています。

患者をとりまく療養環境は必ずしも生活者の視点から整えられているとは限らず、我慢を強いる場面も少なくありません。創造性を発揮して、患者にとってよりよい生活を適える環境づくりに貢献したいと考えています。

3. 方法

2年次生対象の基礎看護学実習Ⅱでは、臨地実習の前に、看護に求められる基本的な態度や看護技術が備わっているか確認するためのOSCE（客観的臨床能力試験）を実施しています。また、OSCEを実施するため、患者役となって演技する「模擬患者」の養成をしています。

臨地実習では、履修生は1人の患者を担当し、患者の個別性に合わせた支援を適えるため看護過程を展開します。

基礎看護技術Ⅳでは、採血や酸素吸入など診療の補助に係わる基本的な技術を学修します。授業の後半では学修した知識を活用し、シミュレーション教育による実践的な演習を実施します。

4. 成果

本学の同窓会などと連携し、基礎看護学実習ⅡのOSCEや基礎看護技術Ⅳのシミュレーション演習のための模擬患者を募集し、30名以上を養成しています。

OSCEにより臨地実習に向けて患者との関わり方、様々な観察方法、報告の仕方など身につけることができました。履修生へのアンケート（実習評価）では、「この実習を通してさらに看護への学習意

欲が高まった」が昨年度 79%から 87%へ向上しました。

基礎看護技術Ⅳの技術確認では、定期試験、課題提出物、ミニテスト、技術確認から評価が行われ、S 評定が昨年度(3 名)から 10 名、A 評定が昨年度 59 名から 86 名へ向上しました。

5. 改善

基礎看護技術を培うために、視覚教材の活用やシミュレーション教育の手法を取り入れ、授業・演習を改善しています。

また、セルフトレーニングルームの整備、シミュレーション教育演習を適える環境を整えることを、シミュレーション教育委員会副委員長として取り組んでいます。

2024 年度第 15 回せいい看護学会学術集会のワークショップでは、看護師、看護学部の学生・教員、デザイン学部・研究科の学生など 24 名がグループになって力をあわせ、患者が抱く生活者としての困りごとを解決するための療養環境のアイデアを考えました。患者のプライバシーと安全な療養生活を両立するアイデアや患者が我慢しないで訴えやすくなる環境作りなどが提案されました。

6. 教育活動

療養環境をより良くする物作りの企業、病院、大学から成る「看護の困りごと解決にむけたネットワーク」に参加しています。アイデアワークショップのアドバイザーなど、療養環境をより良くするアイデア創出のための協力をしています。

グローバル教育推進委員として、海外研修のためのプログラムや環境づくりを担当しています。

国試対策委員として、看護師国家試験の対策のための勉強会や学生国試委員との連携など担当しています。

氏名 吉里 心希

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

※科目責任者ではないが、以下の科目の担当者として授業運営に携わった。

基礎看護技術Ⅰ、基礎看護技術Ⅱ、基礎看護技術Ⅲ、基礎看護技術Ⅳ、基礎看護学実習Ⅰ、
基礎看護学実習Ⅱ、基礎演習

2. 理念

聖隷の理念にある「自分を愛するように隣人を愛しなさい」という志を持ちながら、自分や周りの他者を思いやり接すること、自分を含めた人を、周りを大切にすることを培いながら、看護の基本となる基礎看護技術や看護者としてのコミュニケーション等、理解しやすいように努め、対応する。

3. 方法

看護を学び始める時期であることを絶えず念頭において、わかりやすく、理解がしやすい資料作成、言葉での表現に努める。また、できる限り都度理解度を確認して進めていく。

4. 成果

実施した講義、演習、実習の担当内容はリアクションペーパーや学生からの意見・反応を確認し、概ね成果を上げることができた。授業内容が積み重ねになっているので、今後の内容理解につながっているか、次年度性の様子からも評価できる部分でした。

5. 改善

臨床での技術の進歩等、日々学修を重ね、情報収集して、実際の臨床現場との齟齬がないように常に研鑽し続ける必要がある。

最新のテクノロジーも変化に合わせて習得し、より分かりやすい教材作成もする必要がある。

6. 教育活動

・助産師・保健師・看護師を目指す学生の進路相談を行っている。・アドバイザー学生の相談に対応している。・学生のセルフトレーニング（看護技術の自主練習）の希望に合わせてなるべく指導を行えるよう努めている。・入試委員会の学生広報活動 SSN チームのサポート役として、SNS サイトの管理・運営・調整サポートをしている。・学生に寄り添いながら教育、理解の向上を目指したいと考えている。

氏名 早川 ゆかり

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

2. 理念

看護専門職として必要不可欠な看護にまつわる考え方とその技術の基礎を、根拠を基にわかりやすくお伝えしたいと考えています。

3. 方法

学習者のレディネスに合わせて、講義、演習の組み立てを行っている。また、1つの単元が、事前課題・講義・演習・事後課題で成り立っているため、それらが順を追って、関連づいていくように心がけている。

実習に関しては、実習目標をふまえ、看護の現場で起きることを教材としながら学生に関わっていくように努めている。

4. 成果

学生さん自身を題材（身体や生活を観察）とした事前課題を行うことで、講義の内容の理解が深まったとの反応があった。学生のレディネスを考慮することで、理解を促すことができたと考える。

5. 改善

教授する内容が多く、講義の後半に早口になってしまったことがあった。今後は時間配分に気を付けて授業を組み立てることが課題である。

6. 教育活動

2024年度は、15名のアドバイザー学生を受けもった。

また、よさこい鰻蛇羅とマナの会のサークル顧問として、学生さんらしく活動できるように支援した。

氏名 有村 優範

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

2. 理念

看護学部 に在籍する学生に対し、看護専門職者となるために必要な基礎的知識や技術、態度を修得してもらうために、講義・演習・実習を展開している。対象とする学習者は、成人学習者への過渡期であり、今後、医療・福祉を担う専門職者としての責務を果たす必要がある。そのためには、自ら課題を見つけ、能動的な学習が求められる。学習者が自ら思考し、動機付けができるように学習環境や教材を提供し、成長を促す必要がある。

また、医療者としての態度を養成できるように、どのような姿勢で対象となる人々に向き合う必要があるか、心理面の教育も併せて行う。

3. 方法

学習者のレディネスに合わせ、単元で修得すべき目標を明らかにし、事前、事後課題を含め、講義、演習、実習を通じて基礎的知識・技術の教授を行っている。

講義は、レジュメや PPT、動画、写真を活用して、学習者が視覚的に理解できるような工夫を行っている。また、一方的な教授活動にならないよう、内容に合わせたディスカッションを設けることにより、学習者が主体的に学び、考えを他者に伝える機会をつくっている。

演習では、講義で学習した内容を基に実践し、知識と技術が連結できるような事前・事後課題を課し、学習者の知識・技術の定着を図っている。実習では、日々の講義、演習を統合しつつ、看護職としての考え方やあり方が身に着けられるように、場面を教材化し、学習者への支援を行っている。

実習では、現場の実践活動を通じて、学習者が自ら気づくことができるような発問を心掛け、学内で学んだ知識・技術を統合し、活用できる状態まで高められるように支援を行っている。

4. 成果

動画教材や写真を用いた学習は、初学者にとって実際の理解に繋がるとの反応があった。

教授者自身の体験を混ぜることにより、よりリアリティを持って、学習の重要性を伝えることができたと考える。

前年度のリアクションペーパーや授業評価、試験結果を参照し、追加で説明を要する点などについて、ブラッシュアップを行った。

5. 改善

前年度の改善を受け、演習の時間割を変更したり、演習内容の修正、追加を行った。

以前より、充実した内容になった部分もある一方で、授業時間に対する教授内容が膨大になりすぎた

点も見受けられ、学習者の状況を確認し、次年度につなげる必要があると感じた。

6. 教育活動

2024年度は、15名のアドバイザー学生を受け持ち、大学生活や学習面におけるサポート、相談役を担った。また、アドバイザー学生以外に対しても、就職支援活動や情報提供を行った。

授業の不明点や自己学習課題を求めた学生の指導を行い、技術試験に向けたセルフトレーニングの指導も併せて行った。

バトミントンサークルとダンスサークルの顧問として、学生と協議しながら、サークル運営の一端を担った。

氏名 橋積 亜希子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

2. 理念

基礎看護学領域では、次の専門領域で学ぶ基盤（土台）となる事柄を学修します。この土台がしっかりしていないと、その上に学びを積み上げていくことが困難となってきます。看護をはじめて学ぶ皆さんは、臨床のイメージがわからない中での学修となるため、臨床での事例をふまえながら伝えることが大切だと思っています。

3. 方法

理解がすすむよう、臨床での具体的な事例を挙げながらイメージがわくような伝え方を心がけています。

まず学習者の考えを聞きレディネスを把握した上で、その理解や思考に沿った関わりができるよう努めました。

4. 成果

学習者より、「根拠を理解することができた」とのフィードバックをいただけることができました。

5. 改善

いろんなことを伝えたいという気持ちが先行してしまうことがあるため、学習者の理解に合わせて段階的に伝えることを心がけていく必要があると考えています。

6. 教育活動

基礎看護学領域では、基礎看護技術Ⅰ・基礎看護技術Ⅲ・基礎看護技術Ⅳの演習と基礎看護学実習Ⅰ・基礎看護学実習Ⅱの教員として担当しました。

1・2年次生を中心に8名のアドバイザーを担当させていただきました。

大学院では、診療看護師（NP）の養成に携わっています。

氏名 大石 ふみ子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
病理・病態	157	疾病・治療学Ⅰ	156
疾病・治療学Ⅱ	157	成人看護学概論	156
看護倫理	153		

2. 理念

成人看護学概論（2年生後期）では、成人期の人々の心身の反応と健康や健康問題に対する看護の特徴について、理論を用いて学ぶとともに、提供する看護の基本的姿勢として利他的な隣人愛とのつながりを用いて説明している

3. 方法

我が国において死因第一位のがん疾患を用い、がんを体験する人の身体・心理・社会的問題を事例を用いて学習し、具体的看護のかかわり方が学べるように、理論と事例を行き来する教育方法を行っている

4. 成果

学生からのリアクションペーパーにおいては、深く考える機会になった、自分の体験や家族の体験を想起して内省していることが示唆された

5. 改善

常に具体的な事例を工夫し、事例を用いて概念を学ぶとともに、看護師としての倫理的姿勢にもつながられるように検討を重ねていく

6. 教育活動

学部においては、家族看護学（2年）、成人看護学概論（2年）、4年（看護倫理）を中心に担当していたが、2025年度からは3年生の急性期看護援助論、演習、実習の担当を行っている。さらに、4年生の聖隷看護探求実習、統合実習（急性期）と、卒業ゼミナールについても担当し、2年から4年次までの連続性をもって教育を行っている

氏名 藤浪 千種

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
キャリアデザイン（看護学部）	157	看護研究Ⅱ（成人看護学）	10
国際看護実習	2	急性期看護援助論	77
急性期看護援助論	79		

2. 理念

医療の現場で働く専門職には様々な知識が求められますが、大学での授業時間には限りがあります。また日々目まぐるしく変化する臨床の中では、必要な知識がその時々で変化することも珍しくありません。そのため、授業では重要なトピックを設けるとともに、学生の皆さんが自ら自身の学びを深化させられるようなことを大切にしていきたいと思っています。

3. 方法

講義、演習、実習、ゼミナールなどの形式で学修を行いますが、その中で学生の皆さんの主体的な学修が進むような方法を積極的に採用しています。また、個々の学生さんとの関わりをできるだけ大切にしたいと思っています。

4. 成果

看護研究Ⅱでは浜松市と共同で救急講座を開催したり消防署の救急講座に参加したりと広く地域で学ぶ試みをしました。また国際看護実習はシンガポールの高齢者施設で2週間の実習を行いました。学内だけでなく広く外に目を向けそこでの体験を通して学ぶが学生さんの成長には目を見張るものがあります。今後も様々な体験を大切にしたい授業を展開できればいいなと思っています。

5. 改善

多様な学生の皆さんの学習ニーズにこたえられるよう、事前事後学修を含め授業の工夫をすすめていきたいと思います。

6. 教育活動

学部、大学院の授業・演習・実習を担当しながら、アドバイザーの役割なども担っています。

氏名 乾 友紀

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
急性期看護援助論演習（1st）	19	急性期看護援助論演習（2nd）	20
急性期看護援助論演習（3rd）	19	急性期看護援助論演習（4th）	19
災害看護論	153	急性期看護援助論演習（1st）	20
急性期看護援助論演習（2nd）	19	急性期看護援助論演習（3rd）	20
急性期看護援助論演習（4th）	20		

2. 理念

成人看護学の教員として、さまざまな幅広い世代の対象を理解する姿勢と課題解決に向けて自ら主体的に考え看護を实践できる看護専門職の育成に関わりたいと考えている。

特に、急性期看護学では、心身ともに変化が激しく多大な影響を受ける患者を対象に、身体・心理・社会的な側面からの総合的な分析と、的確な看護援助を導き行動できる実践力を養うことに重点を置いている。周術期看護では、術前から術中・術後の状況をイメージ化しやすいような授業設計と授業方法を工夫している。実習を通して患者への看護を实践する経験から、急性期における看護の特徴とやりがいや楽しさを伝えていきたいと考えている。

3. 方法

科目責任者として担当する急性期看護援助論演習では、アクティブラーニングを主体とし、看護過程の展開や異なる周術期の場面を取り上げたシミュレーションを行っている。シミュレーションは履修する学生全員が参加できるようにし、デブリーフィングを通して学生間、教員ともディスカッションし、学び合えるよう双方向性を意識している。

講義では、限られた時間の中ではあるが、担当するテーマに関する重要なポイントを説明し、より理解を促せるようにイメージしやすい内容を心がけている。

4. 成果

急性期看護援助論演習の GPA は平均が 3.1（春セメスター平均）であり、比較的高い値で推移していた。1 週間の集中型であるため、学修の成果が課題レポートに反映されていると考えられる。演習後の実習では、演習の学びを活用して実習に取り組むことができた、等の感想が聞かれている。引き続き効果的な学修に学生が取り組むことができるような授業設計、各科目との連動性を図りたい。

5. 改善

周術期看護のイメージ化を学生ができるようにし、急性期看護に必要な思考や視点を獲得できるような授業内容をさらに見直していく。また、演習スケジュールがタイトであるため、授業時間が延長したことがあり、授業内容の見直しや適切な進行を心がけていきたい。

6. 教育活動

アドバイザーとして学生が相談しやすい教員で在りたいと考えている。また、アドバイザーだけでなく実習や学修面、進路等学生の相談にも応じていきたい。

氏名 寺田 康祐

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（急性期看護学）	25	統合実習（急性期看護学）	25

2. 理念

学生が思考していることを大切にし、そこから看護への興味、意欲が持てるようにかかわり続ける。
4年間の教育で学ぶことは多いが、全てが看護師・保健師・養護教諭の道につながっていることを示しながら、将来についても考えられるように、看護を楽しいと思えるように学修をサポートしている。

3. 方法

講義・演習では、解剖整理や病理病態など基礎知識を大切にしながら、実習で活用し経験できる内容であることを意識している。

実習では、今後活用できる考え方、実践方法などを理解し活かせる内容であることを意識している。
統合実習・統合セミナーではより臨床に近い実習を行うことで、リアリティーショックの軽減を図り、看護師として働く自己をイメージできるように環境を整えた。

4. 成果

講義・演習で実習に向けた準備を行い、実習では学生が患者に対する看護実践を学修し一部実践することができている。

5. 改善

学生がさらに知識・技術を身につけ、看護に興味を持てるような講義内容、実習内容となるようにする。

6. 教育活動

アドバイザー活動

氏名 和田 由樹

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
慢性看護援助論	77	慢性看護援助論	79

2. 理念

私は臨床現場で看護管理者、専門看護師としての実践が長く、看護基礎教育での教員としては経験年数が短いです。

教育に係わるうえで大切に、学生に求めることは、「倫理観」を持った専門職者であることです。看護職者は人間の生命、人間としての尊厳及び権利を尊重し、平等に看護を提供する存在です。そのような看護職者を育成することは、本学の建学の精神と同じ意味を持つと考えています。また学生は自由で多くの可能性をもつすばらしい存在です。学生と教員がお互いを尊重しあえる関係でありたいと思います。

3. 方法

講義、演習、実習という教育方法を用いています。どの方法でも、長く実践家として臨床現場に身を置いていた経験から得たことや、病いを持ちながら生きる人々やそのご家族の声を学生に伝えることを意図的に行っています。個別性をもった対象者へ看護職者として係わることにおいては、机上の学習だけではなく、その他何を学生自身が修得する必要があるのかを自分で見つけられるよう、発問や対話という方法も活用しています。

4. 成果

抽象と具体を織り交ぜた講義内容を心がけております。学生からのリアクションペーパーでは、机上の学習と臨床現場の実際が結びつきやすく、理解がしやすかった、看護師になることの責任を考えた、あるいは看護の可能性が広がったなどの声をいただきました。

5. 改善

学生による授業評価では、質問項目のなかで目標の達成に関する項目が最も評価が低い結果でした。

もっと各科目の目標に沿った講義内容構築を意識し、学生の理解が進むような方法を検討したいと思います。また、学生がさらに自律的に学修をするための支援が必要だと考えています。

6. 教育活動

学内：アドバイザー

学外：聖隷浜松病院看護部との研究活動、専門看護師としての関連学会での委員会活動

氏名 水島 史乃

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

2. 理念

・成人看護学慢性看護学領域の授業・演習・実習に携わるにあたって、「人格形成」「個人の価値を尊重する姿勢・責任感をもつ・自律心をもつ、ことを育む」ことを基盤として、医療者を目指す学生にかかわる。

・上記のかかわりのなかで、臨床経験がいかせると考えた場面では、それを学生や教員と共有して、ともに成長する機会とする。

3. 方法

授業・演習・実習において、

学生の発想を表現できるように時に待ちながら促すこと、また、学生の言動に必ず反応して学生を気にかけていることをできる限りさりげなく伝えることを心掛けている。

4. 成果

実習担当した学生の評価面接のときに得られた言葉のなかの、授業や演習が実習につながっていた、いつでもなんでも教員に尋ねることができる学修環境であった、ということから、学生の成長の兆しを感じ取れたため、成果があったのではないかと考えている。

人格形成や、価値観の尊重、責任感や自律心を育むことについては、成果は明らかではないが、日々接するなかで、時間を守る、他人を気遣う、などの態度をみることができるので、自身の力ではなく教員全体のかかわりの成果としてはあると考える。

5. 改善

ほかの教員の助言や評価を受けて、自身が担当する授業・演習のコマや、実習を担当する学生へのかかわりや評価、について、まずは見習う形で改善していきたい。

6. 教育活動

アドバイザーとして担当学生の面談を行う（春semesterと秋semesterで各1回以上、学修支援面談対応、学修計画書作成支援、就職試験用の小論文添削面談、就職試験用面接練習など）。

氏名 河野 貴大

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
慢性看護学実習	77	慢性看護学実習	79

2. 理念

臨床現場で起こるさまざまな現象を教材化し、学生自身が興味をもって学修し続けられるように指導することを心掛けています。臨地実習では、将来看護師として働くうえで必要不可欠となる他者に自分の考えを伝える力や、自身の実践を文献と比較し省察する力を育むことができるように支援しています。学生が受け持ちの患者様に関心を寄せて関わるなかで、大切にしたいと思うこと、考えを尊重しながら、必要な看護を考え実践していくことができるようにサポートしていきたいと考えています。

3. 方法

慢性看護学実習では、「慢性疾患により入院治療を受ける患者とともに健康問題を見出し、解決するための能力を養う」ことを目的に、以下①～④の目標を掲げ実施しています。

- ①慢性疾患が患者と家族に与える影響を身体的、心理的、社会的側面からアセスメントできる。
- ②病いをもって生活する患者と家族の療養上の問題を抽出し、看護過程を展開できる。
- ③病いをもって生活する患者と家族が、自律した生活を送るための支援を理解し、看護を一部実践できる。
- ④慢性疾患看護の看護実践を通して、病いをもって生活することに対する看護者としての考えを深めることができる。

臨地における実習期間は 8 日間とし、学生は臨地実習期間中に 1 名の患者を受け持ち、対象者の病態関連図・全体像・アセスメント、セルフマネジメントもしくは退院支援に焦点を当てた支援を含む看護計画の立案、実施、評価の一連の看護過程を展開します。主に病棟指導者、病棟課長、病棟スタッフ、実習担当教員が学生指導に関わり支援します。

4. 成果

新カリキュラムでは実習の直前に演習を行い、慢性疾患を有する患者の紙上事例に対して看護過程の展開を実施していることから、看護過程の考え方や理論等について学生の思考は整理されていました。学生は受け持ち患者に関する情報を意図的に収集し、病態関連図によって全体像を捉え、看護計画を立案し一部実践・評価することができています。受け持ち患者の状況によっては清拭、足浴をはじめとする清潔ケアや排泄ケア、移乗介助、簡易血糖測定等を実施する機会を得ることができ、患者の状況に合わせたケアについて病棟指導者や実習担当教員からフィードバックを得ることで学びを深めることができています。臨地実習後には学生が患者に実践した看護や患者の反応を振り返って言語化し、他者に伝えることで自身の思考を整理するとともに、文献と比較して考察することにより新たな課題に気づき学びを深めることができています。

5. 改善

実習 2 週間のうち 1 週目に体調を崩すことでアセスメントや看護実践が限定的・部分的になってしまいう学生もあり、学生の体調管理が課題であると考えています。教員が学生の体調管理状況を把握しながら学生が実習に安定して取り組んでいけるよう検討していきたいと思います。

6. 教育活動

アドバイザー

氏名 山崎 淑恵

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（慢性看護学）	25	統合実習（慢性看護学）	25
慢性看護援助論演習（1st）	20	慢性看護援助論演習（2nd）	19
慢性看護援助論演習（3rd）	19	慢性看護援助論演習（4th）	19
慢性看護援助論演習（1st）	20	慢性看護援助論演習（2nd）	20
慢性看護援助論演習（3rd）	19	慢性看護援助論演習（4th）	20

2. 理念

慢性看護援助論演習では、到達目標を

1. 慢性疾患を有する人の看護過程に関わる基本的知識を理解できる。
 2. 臨床事例を用いて、ゴードンの 11 機能的健康パターンで看護に必要な情報を系統的に収集・解釈・分析・統合ができる。
 3. 対象の情報から解釈・分析・統合をした上で、看護問題を明確化できる。
 4. 対象の状況をアセスメントした上で、具体的な看護計画の立案および評価・修正できる。
 5. シミュレーション演習を通して、アセスメントに基づいた具体的・実践的な患者観察が実施できる。
- としています。

3. 方法

本演習では、講義、グループワーク、シミュレーションなど、多様な学習方法を取り入れています。
看護過程演習:

慢性疾患（COPD）を有する架空の患者事例を用い、個人ワーク、グループワーク、全体共有を通して、看護過程の展開を学びます。

グループワークでは、学生同士が意見交換や議論を通して、多角的な視点から患者を理解し、看護計画を立案する力を養います。

全体共有では、各グループが立案した看護計画を発表し、質疑応答を通して、学びを深めます。

シミュレーション演習:

ロールプレイを通して、患者との効果的なコミュニケーション技術、患者観察技術、セルフマネジメント支援技術を習得します。

特に、患者の自己効力感を高め、パートナーシップを構築するための対話技術に重点を置きます。

患者の病状の変化に合わせたアセスメントの方法を習得するために、シミュレーション患者の観察内容について優先順位をふまえながら実践できるようにします。

4. 成果

看護過程演習において学生は、疾患の病態生理、症状のメカニズム、治療方法について深く理解を深め、患者を生活者として全人的に捉え、個別のニーズに合わせたセルフマネジメント支援計画を立案することができました。グループワークでは、活発な意見交換を通して、自身の考えを根拠に基づき論理的に言語化し、他者の意見を傾聴するアクティブリスニングを実践する能力が向上しました。さらに、対話演習・患者観察演習を通して、アセスメントに基づいた具体的な看護計画立案、優先順位を踏まえた実践、評価、改善といった看護過程の展開を体系的に学ぶことができました。特に、患者の個別性を考慮した看護計画立案では、学生の創造性と倫理的思考が表れました。

5. 改善

シミュレーション演習において患者役のリアリティを向上させるために、より具体的なシナリオや方法を検討します。

6. 教育活動

SGE-PJ：学生による婦人科がん検診啓発活動をおこなうプロジェクトです。

アドバイザー活動

氏名 長山 有香理

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

2. 理念

学生が主体的に学び、看護学の楽しさを実感できるような教育を大切にしています。看護は「人を支える」仕事であり、知識や技術だけでなく、人との関わりの中で学ぶことが多くあります。そのため、学生一人ひとりが自ら考え、学び、成長できるような環境を整え、学ぶ喜びを感じられる教育を目指しています。

3. 方法

シミュレーションやロールプレイを取り入れ、理論と実践を結びつけ臨床のリアルな場面を想定したケーススタディを行い、学びを深め、実践的な学びの提供をしました。また、答えを教えるのではなく、考える力を育む質問を投げかけるように心がけ、学生同士のディスカッションを促し、学び合う環境を作るよう努めました。さらに、学生が成功体験を積めるよう、小さな達成感を大切に、「できた！」という自信につながるよう、適切なフィードバックを行い、学生の不安に寄り添いながらも、共に考え、気づきを得る場を提供することで、新たな課題に挑戦できるよう支援しました。

4. 成果

これまでの関わりを通して、学生から「先生と一緒に考えてくれた」「自分で答えを見つけることができた」などの声が聞かれました。これは、学生と対話しながら共に考え、学びのプロセスを支援する関わりができたからだと感じています。学生が主体的に考え、学ぶことの楽しさを実感できたことは、大きな成果の一つです。

5. 改善

すべての学生が同じように主体的に学んでいるとは限らないことも課題です。特に、自信が持てず発言や行動に迷う学生に対しては、より細やかな支援が必要だと感じています。今後も、学生が主体的に学び、「看護を学ぶ楽しさ」を実感できるような教育を目指し、一緒に考え、支えていきたいと思っています。

6. 教育活動

アドバイザー

氏名 山田 紀代美
職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
老年看護学概論	156		

2. 理念

老年看護学領域は、加齢に伴う身体的・心理的・社会的側面を統合して捉える必要があること、支援においては社会・経済的な影響を受けることなどから学際的なアプローチが求められる領域といえる。昨今の高齢社会を見据え、学生には高齢者の理解を深め、高齢者に対する尊厳を持ちながら関わってほしいと願っている。特に、老年看護学では、高齢者の多様性と持てる力を生かすことを念頭に、様々な理論や価値観について教授していることから、初学者には理解に時間がかかることもあるかもしれない。しかし、正解が一つでない分、想像力を働かせることで新たなものを発見することにつながる可能性もある領域といえる。これらを意図して講義している。

3. 方法

講義はオムニバスであることから、それぞれの教員により方法を工夫した。ある教員は、臨床の経験を活かし、高齢者の特徴について事例を通して生き方や考え方、あるいは入院中の高齢者の様子などを生き生きと語ることで高齢者のイメージ形成に貢献していると考え。また別の教員は、高齢者の健康問題やその支援方法について、最新の研究結果を図や表を用いて視覚的に伝えるように努めた。加えて高齢者とのインタビューを講義内に組み入れること、それをグループで共有すること、学年全体で議論することを通して高齢者の共通性と個別性に気づくことができるように計画した。また、毎講義終了時には学生の講義の理解度を問うための課題を出題し、それに回答することで講義内容の定着を図るようにした。

4. 成果

本科目の GPA については、昨年度よりも点数が低下してしまった。2023 年度はその前の年度よりも点数が良かったために、昨年度の方法を踏襲して今年度も実施したが、それが 2024 年度制には適していなかったのかも知れない。学生のコメントなどを再確認し、2025 年度に臨みたいと思っている。

る。ただし、個々の講義後のリアクションペーパーでは、高齢者や老年看護学への興味関心を持つことができたとの感想も見られた。また、研究論文等のデータを使うことでより科学的根拠の重要性を認識した学生もいたことから毎回の学生のコメントを次回以降の講義に適宜反映・対応できるように機動力を駆使して実施していきたいと考える。

5. 改善

GPA が低下したことから、講義内容の定着に多少課題があることが推察された。毎回の講義後に小テスト等を入れて知識の定着を計っていたので、それは継続したいと考えている。一方、2023 年度に比較し、学生の講義の欠席回数や遅刻等が目立った。欠席は学生個々の体調や都合もあることから限度内であれば問題はないものの、遅刻は学生の講義への姿勢の表れと見ることもできる。以上からより講義内容の定着を計るためには、講義への出席状況を改善することも必要と考える。したがって講義がおもしろい、聞きたいと思わせるような講義を行うと共に、学生の出席管理も丁寧に行っていきたいと考えている。

6. 教育活動

なし

氏名 渡邊 昌子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（老年看護学）	8		

2. 理念

・私は医療機関で看護管理者として教育研修を通し、多職種を含む人材育成や学生の実習指導に長く携わってきました。

教育理念として『教育＝共育(ともに育つ)』の考えのもと、常に思考し、主体的かつ創造的で自分の強みを活かすことができる人材育成を行うことです。特に大切にしていることは、『その人の持つ可能性を信じ、共にある』ことです。教員経験は短いですがこれまでの経験を活かし、皆さんの大学生生活の充実に寄与できればと思っています。

・科目の看護研究は、看護の質を向上させるためには不可欠です。

臨床現場では、課題や疑問を解決するために研究に取り組むことの必要性を分かっているものの、「研究は苦手」「難しい」「できればやりたくない」と思っている看護職がいることは事実です。研究のプロセスを理解し、研究に取り組むことで深く考える力や客観的に捉える力などが身につくことを体験する機会を増やすことで「研究は案外面白いかも」という思考の転換ができるよう支援ができればと思っています。

3. 方法

シラバスにある看護研究Ⅱを基に対象学生8名を教員4名で分担し実施しました。研究計画書提出までのスケジュールの概要を示し、日程調整を行いました。対象学生の関心のあるテーマに関連した論文5～10本を読み、論文抄読を行い課題の、明確化など研究のプロセスを踏み研究計画書の作成を支援しました。特に研究の鍵となる『本人の動機』は変えないという点に注意を払いました。

4. 成果

文献の抄読を通し、文献の読み方が深くなり「読むのが面白いと思うようになった」と学生の言葉が聞かれるなど、すべての学生が意欲的かつ主体的に取り組むことができていました。今後現場で看護

研究を行うにあたり、研究計画書がどのようなものか、倫理的配慮を学ぶなどを通して看護研究の基礎ができたと思われます。

5. 改善

学生からの意見はなく、教員からも改善点はないということで継続していく方向です。

6. 教育活動

学内：看護研修センターにおける看護師の特定行為研修の人材育成

学外：専門職能団体や関連学会などでの役員・委員としての研修・教育活動

氏名 木村 暢男

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
老年看護援助論	77	看護統合セミナー（老年看護学）	19
老年看護援助論	79		

2. 理念

学生の理解度や疑問点等を、学生とのコミュニケーションにより把握しながら、できる限り学生が「わかった」、「できるようになった」と思える教育をしていきたいと思います。特に、教科書を読んでも理解できないような概念や理論等を、学生とコミュニケーションを取り、教員が経験した事例等を交えながら、分かりやすく解説していきたいと考えています。その中で、学生が看護の勉強をする「楽しさ」に目覚め、主体的で将来の目標につながる勉強を後押ししていきたいと思います。

3. 方法

学生とのコミュニケーションを重視していきたいと思います。特に、演習や実習指導において、学生が理解できないこと、どのようにしたらよいかわからないこと等を、コミュニケーションを通して把握したいと思います。授業で行ってきた勉強等を振り返りながら、授業⇒演習⇒実習が効果的に連携していき、学年の進行とともに学びを深め、興味や関心を引き出していきたいと思います。そのために、教員からは、学生と頻繁にコミュニケーションを取ると共に、学生が教員に相談しやすい環境や雰囲気を整えていきたいと思います。また、学生ができていることは積極的に認め、励まししながら、学生の学ぶ意欲を引き出していきたいと思います。

4. 成果

演習やグループワークにおいて、随時、学生の進捗状況を把握し、学生が理解できていない部分が理解できるような教育を行う努力を続けてきました。特に、老年看護援助論演習の看護過程においては、学生が躓いている部分を把握し、フィードバックを行うことにより、それを老年看護学実習における看護過程の展開につなげていけるように支援しました。老年看護学実習においては、その老年看護援助論演習の看護過程の理解を基に、学生の主体的な高齢者との関りを支援し、何を目的として実習を行っているのかを確認しながら、日々の実習指導を行ってきました。日々の実習指導において、

学生と密にコミュニケーションを取り、学生の進捗状況を日々確認しながら、学生のレディネスに合わせた個別の指導を心がけました。学生は実習を通して、高齢者の身体状態や認知機能に合わせた、「その人らしい生活」の支援を学び、高齢者の生活を支援する看護の役割を学ぶことができたのではないかと考えています。

5. 改善

実習を行う学生の中には、対象者の方の身体的状態や認知機能の分析方法がわからない方もいらっしゃると思います。その分析が不十分になると、高齢者の「その人らしい生活」を支援するための看護の目的や看護師の役割が曖昧になり、目標とする高齢者の生活像が具体的に描けなくなってしまうと思います。その状況を回避するために、解剖生理や病態等の基本的な理解や、老年看護の基本的な理論に立ち戻りながら実習に取り組めるように、学生と一緒に考えていく必要性を感じています。学生が理解できない時や、どのように進めたらよいか困っている時は、それまで学生が学び身に付けてきたことを振り返りながら、基本に戻って理解を促していきたいと思っています。

6. 教育活動

アドバイザーの役割として、常に学生に心を開き、いつでも学生が相談できる環境を整えていく必要性を感じています。地域実践に関しては、8月に三方原協働協働センターにおいて、4年生に認知症予防講座を行ってもらい、地域在住の16人の高齢者の方々の認知症予防に貢献できたかと思っています。4年生にとっても、元気な高齢者に対する認知症予防の意義を学ぶ、よい機会になったと考えていますので、今後も毎年行っていきたいと思っています。6月にはアメリカからの留学生を迎え、日本の看護や医療そして介護を学ぶ環境を提供できたかと思っています。また、4年生に対しては、3月～5月にかけて就職活動の履歴書作りや面接練習を行い、希望する就職先の内定の確保に向けて支援をしてきました。国家試験対策に関しては、特に、10月からは模擬試験の成績不良者に対して個別の面談により、成績改善のための指導を行ってまいりました。授業・演習・実習以外の学びの場においても、学生が将来の目標に向けて主体的に学びを深めていけるように、支援していきたいと思っています。

氏名 内藤 智義

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
老年看護援助論演習（1st）	19	老年看護援助論演習（2nd）	19
老年看護援助論演習（3rd）	19	老年看護援助論演習（4th）	20
統合実習（老年看護学）	19	老年看護援助論演習（1st）	20
老年看護援助論演習（2nd）	20	老年看護援助論演習（3rd）	20
老年看護援助論演習（4th）	19		

2. 理念

・認知症の高齢者が「その人らしく、心地よく排泄する」ことを支えるケアをめざし、使命感をもって研究している。研究成果は担当する講義・演習・実習を通じて看護教育に還元していく。さらに超高齢社会の我が国を支える役割を担う学生の皆さんに、老年看護の魅力・やりがいを伝えられるように努めていく。

3. 方法

・老年看護援助論演習では、高齢者が疾患・障害を持ちながらも、その人らしく生活を営むことができるよう ICF（国際生活機能分類）の生活機能モデルなどから目標志向型思考で課題を抽出する看護過程の展開を学修できるよう授業を構築している。さらに、高齢者疑似体験演習・立案した看護計画の実践を通して、高齢者理解を深め高齢者の特徴に合わせた援助技術を習得し、老年看護学実習の準備を整えることができるよう工夫している。

・開発した教材：看護学生及び臨床看護師を対象にした「本人の視点から学ぶ高齢者援助」の原案を担当し、医学映像教育センターと DVD を作成した。老年・在宅看護領域間で膀胱に対するポータブルエコーを用いたシミュレーション教育方法を作成し、演習に導入している。看護学生に対する教育効果については前向きコホート研究により評価済みであり、今後は学会及び論文にて公表する予定。

4. 成果

・老年看護援助論演習は、平均評価平均値 3.8 点（最大 4 点中）と高い評価となっている。複数の学生へのインタビューでは、老年看護過程の展開が分かりやすかった、老年看護実習にすぐ役立つ内容であった、ポータブルエコーなど最新の知識・技術が学べてよかったと概ね良好な評価を得ている。

5. 改善

- ・2024 年度の履修生からの明らかな要望はなかったが、引き続き学生の希望・要望に応えられる改善をしていく。
- ・既に開発した教材（本人の視点から学ぶ高齢者援助に関する DVD、膀胱へのポータブルエコーを用いたシミュレーション演習）の評価を継続的に実施していく。
- ・今後は学生が実際の高齢者と接してリアリティある看護技術体験ができるように、地域在住高齢者を教育ボランティアとして募集したヘルスアセスメント演習かつ、治療・療養支援看護領域（老年、成人（急性期・慢性期）、在宅看護領域間）で共同して教育指導できる演習内容の企画・運営を目指す。

6. 教育活動

- ・アドバイザー教員として、充実した大学生活を過ごし、ディプロマ・ポリシーに到達し卒業できるように学修指導をしている。
- ・課外活動：「気持ちよく出すことを叶える排泄ケア」の看護教育導入プロジェクトリーダーを担当している。全国の複数大学の看護教員とともに、正確な知識にもとづいた気持ちよく出すことを叶える排泄ケアの浸透のため、看護教育における現状と課題を明らかにした上で、モデル案の作成を目指し活動している。

氏名 加藤 貴子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
老年看護学実習	77	老年看護学実習	79

2. 理念

高齢者施設で生活する高齢者の援助の実践を通して、高齢者看護に必要な基本的知識・技術・態度を身につける。

3. 方法

病院実習（1週間）・施設実習（2日間）行う。各実習施設にて対象者1名を受け持つ。病院実習では、目標志向型思考にて看護過程を展開し実施評価を行う。施設実習では、高齢者の生きがいや楽しみ、希望などを把握し、高齢者への看護ケアを学ぶ。また、施設実習では看護師のシャドーイングより、施設の特徴と多職種連携、施設の中での看護師の役割について理解を深める。これらより高齢者に関心を持ち、適切なコミュニケーションの方法、加齢による身体的・心理的变化及び社会的役割の変化や疾病や障害を持ちつつ自立を目指しながら生きる高齢者についての理解を深める。また、高齢者に対する尊厳ある態度を身につけ、老年観を発展させる。

4. 成果

今年度より病院実習が加わったことで、高齢者の治療と看護の幅が広まり、知識・技術の修得に繋がった。また、それぞれの施設で対象者を受け持つことで、真摯に対象者へ寄り添い老年看護を学修することができた。

高齢者施設では看護師のシャドーイングや学内での施設実習の合同発表会を行い、これらを通して施設の特徴や施設で働く看護師の役割について学びを深めることができた。

5. 改善

実習施設が、病院と施設と2つとなるためそれぞれの施設での期間が短くなる。よって、学生の実習満足度や達成感が十分でない学生がいた。今後は、学生の学修意欲を把握しながら、短い期間でも

学生が学びたいと思うような学修方法を創意工夫する。

6. 教育活動

老年看護援助論演習で高齢者との関わりを深めていかれるような講義・演習としているため、これらの内容を実習につなげ実践していける実習とする。

氏名 藤本 栄子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
母性看護学概論	155		

2. 理念

自分で考え判断し、行動できる人の育成を目指して教育に携わっている。

また、学生が4年間の学修成果として、隣人愛を基盤に人と関わり、自分と向き合いながら、看護における論理的・科学的な知識・技能を身につけ、その人のQOLを高める看護実践を探究できるよう教育に取り組みたいと考える。

3. 方法

1. 学生とのやり取り：

- ・学生の感じたことや意見を聞く時間を入れて、双方向性の授業となるようにする。

2. 授業の工夫：

- ・初回のオリエンテーションで、講義スケジュール（単元）を示し、目的に沿って、何をどのような順序で学習するかを示す。
- ・各単元が母性看護学の主要な概念とどのように関係するかを伝える。
- ・事前学習で必要な知識を整理できるようにする（Nursing Skills、ビジュランを活用する）。
- ・事前学習内容と授業を繋げられるように、質問を投げかける。
- ・学生が、妊婦さんや育児期のお母さんに体験を聞ける機会を持ち、対象を具体的にイメージできるようにする。

4. 成果

2024年度の学生の授業評価アンケートでは、平均3.5で概ね良好であるが、2022年度（新カリ1年目）と比較して、以下のように授業方法等に関わる項目が全体的に低下している。

- ・「説明のわかりやすさ」(3.57→3.49)、「興味を引き出す工夫」(3.67→3.41)、「授業計画通りの実施」(3.60→3.69)、「学生が意欲を持てか」(3.60→3.51)、「目標を達成できたか」(3.37→3.39)、「自身の

成長実感」(3.67→3.54)

2023 年度と比較して、2024 年度の GPA は低下している (2.18→1.99)。

5. 改善

事前課題と授業中の学習ポイントとの繋がりを学生さんが深められるように、発問をしていく。

6. 教育活動

ナンヤン理工科学院 (NYP) やサミュエルメリット大学 (SMU) の学生さんとの交流に参加しています。

氏名 神崎 江利子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
母性看護援助論	77	看護統合セミナー（母性看護学）	17
看護統合セミナー（母性看護学）	1	統合実習（母性看護学）	18
母性看護援助論	78		

2. 理念

実習・演習・講義を通して、以下のことが身につけられるよう支援していきたいと思います。

1. 主体的に学ぼうとする力を身に付ける。→ まずは、自分で考えて行動する。今の自分を理解する。
2. 自ら進んで労を厭わず多面的な経験を通して学ぶ。→ 機会があれば多くのことにチャレンジして欲しい
3. 自分の考えや思いを自分の言葉で伝えられる。→ コミュニケーション能力を身に付ける。
4. 主体的に講義・演習・実習に取り組むことができる→自ら計画を立て、同時期におこる事柄を調整しながら実施する。
5. 相手に寄り添う援助について考えることができる。→ 相手のことを考えた援助ができる
6. 相手や周囲の状況を判断しながらタイミングよく行動する。→ 自分の行動を調整できる
7. 自分の心身の健康が維持できる。

※追加して、助産師について紹介する 施設や地域で親子に関わる助産師の役割や魅力を伝える

3. 方法

・学生の反応が確認できるよう、小クラスにわけて講義・演習をおこなっている。

・演習の時間を多く取り入れ、自らの頭で思考して理解を促進するようにしている。

学生が母性の対象をイメージしやすいよう、妊娠期から産褥期まで同じ事例を通して学んでいる。

演習やロールプレイでは事前学修（上記の事例への援助）を基にグループワークやディスカッションを実施する。

自分の思いや意見を自分のことばで、相手にわかるように伝えあう。

・全体での発表で自分達が行ったことや学びを伝えあう

4. 成果

- ・学生からの授業評価アンケートでは、比較的高い評価を得ている。
- ・リアクションペーパーに講義を聴いて、自分や身近な人と重ねることができイメージにつながり、興味を持てたという言葉がみられた。

5. 改善

- ・今年度も授業評価の自由記載に「課題が多く大変だった」という声がきかれている。
同時期に各領域から課題が出されるため量を調整し、学生に過重負担とならないよう調整が必要である。

6. 教育活動

- ・助産師を目指す学生の進路相談おこなっている。
- ・アドバイザー学生の相談に対応する。
- ・地域で開催している孫育てセミナーに立ち上げから参加し、企画・運営に携わっている。
学生も活動と一緒に参加できるよう、臨地看護実習の一環として取り組んでおり、
病院のみならず地域における母子や家族への支援に着目してもらい、地域での母子保健活動を担う人材を育成していく。
- ・看護師国家試験対策として勉強会を催した。

氏名 室加 千佳

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（母性看護学）	6	聖隷看護基盤実習	165

2. 理念

私が最も大切にしている教育の理念は「主体性をもち行動化すること」である。そのために、講義・実習にて教授する過程で大切にしていることは、学生が興味を持って、講義・実習に参加し、看護の楽しさを実感できることを心掛けている。さらに、学生が「論理的な思考力」「自主性」「コミュニケーション能力」を身に着けることを重視している。これらの能力は、看護の分野で、活躍・貢献するうえで必要となる能力であると考えているからである。これらの能力を大学生活において身に着け、社会に貢献し、人の役に立つことを喜びと感ぜられるような人材に成長して欲しい。

3. 方法

聖隷看護基盤実習では、聖隷の理念と歴史の講義科目とも連動しながら、教授を行った。さらに、聖隷の理念を学生自身が体感してもらえるように、事前学修として聖隷歴史資料館での学びを追加し、実習での体感を言語化できるように、ワールドカフェの充実を図った。母性看護学概論では、胎児を人としてみなすかという看護者に直面する事例を基に、生命倫理感について話し合いを行い、学生が意見を述べるように設定した。母性看護援助論演習では演習に力を入れ、看護技術に関しては、新生児や子どもに対して共通する技術を、小児看護学領域とともに実施し、新生児から乳児・幼児のつながりを意識し教授した。さらに、リハビリテーション学部とも協働し、新生児の原始反射をVRにて体感し、新生児への興味への促進を図った。新生児・早産児のケアを360度カメラにて視覚化し、知識のみでなく、多面的思考を養い、実践・行動化できるまでを到達目標とした。母性看護学実習では、早産児高機能シミュレータを用い、思考の可視化、看護判断を、実践・行動化できるシミュレーション演習を展開した。看護研究Ⅱでは、研究計画書の作成のみならず、ステップアップしたい学生には、一緒に学会参加を行い、学会の雰囲気や方法を学ぶ機会を設けた。

4. 成果

聖隷看護基盤実習では、95%以上の学生が実習目標を到達できたとし、「今後の看護の勉強に対する意欲につながった」と評価している。早産児高機能シミュレータを用いた演習では、約9割の学生が「早産児の看護についての理解を深めることができた」と評価し、「ケアの必要性を可視化できたことで、知識・技術が定着したと思う」との感想が得られた。看護研究Ⅱの中で、学会参加を学生と共に実施した。

5. 改善

聖隷看護基盤実習において、学生が一層、聖隷の精神を感じ、今後、聖隷関連施設への興味関心を抱くことができるように工夫する。さらに、学生の思考の可視化・統合化、看護実践の行動化を高める教材を開発したいと考えている。

6. 教育活動

アドバイザーとして、アドバイザーの相談に乗り、心身フォローを実施している。学生オープンキャンパス企画委員のサポート役として会議に出席し、企画調整している。NICU 卒業児の懇談会にもボランティアとして学生と共に参加しているため、今後も活動を継続したい。

氏名 村松 美恵

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
母性看護学実習	77	母性看護学実習	1
母性看護学実習	78		

2. 理念

臨地実習では、学内の講義・演習で学んだことを臨床の現場で実際に行われている看護とつなげて思考できるよう支援したいと考えている。臨床現場の空気感も感じ取ってほしい。

3. 方法

webclass に実習方法など実習に関するお知らせを掲載し、実習についてイメージできるよう工夫している。実習では、実習生が感じたことを言語化できるよう支援する。

4. 成果

実習評価ではおおむね良い評価を得ている。実習評価の自由記載内容については他の教員と相談しながら対応している。

5. 改善

Webclass の事前課題がわかりづらいという意見があり、次年度からは事前課題をまとめて表示できるよう修正した。

6. 教育活動

アドバイザーとして年に数回面談実施した。国家試験対策委員として4年生の受験勉強を支援した。

氏名 宮谷 恵
職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
小児看護援助論演習	77	子どもの保健	22
小児看護援助論演習	78		

2. 理念

昨年度同様ですが「相手の個性をとらえてその人を尊重しながら、その人に合った対応を考え、その人の自立を目指して関わる」という看護の考え方は教育に通じると思い、その理念に沿った実践を心がけています。学生個々の個性に合わせて、学生気質の変化にも対応した授業ができるよう努力しています。

3. 方法

授業に関連するできるだけ最新の動画やニュース記事を多く取り入れて、学生の興味をひく分かりやすい説明をすることを心がけています。学生が書いてくれる授業の感想・質問コメントは全部目を通し、次の授業時等にちゃんと答えるようにしています。

4. 成果

看護学部3年次生は2ブロック制になり時間的に詰まった授業だったと思います。こちらも試行錯誤しながらでしたが学生の皆さんは頑張ってくれてくれました。評価も初年度としては悪くなかったと思います。

5. 改善

学生の授業の感想・質問コメントの中に入れてくれた授業改善への意見は授業時に内容を公開し、改善できるようにしています。授業評価内に書かれていた意見については、領域で話し合い検討します。

6. 教育活動

アドバイザーグループの学生にはもちろんですが、アドバイザーとなっていない学生も就職や進学等の相談に来てくれるので、同じように対応しています。茶道部の顧問も長年担当しています。

氏名 小出 扶美子

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（小児看護学）	18	統合実習（小児看護学）	18
小児看護援助論	77	小児看護援助論	78

2. 理念

小児看護の面白さと難しさと奥深さをを実感できるように講義を行う。実習でも学生に対して、その考えや意見をよく聞き、丁寧に誠実に対応する

3. 方法

講義の要点がわかるように講義し、講義後の自己学修につなげていく。

講義では小児看護に関する問いをつくることで、小児看護の難しさと看護の方法の工夫などを考えるきっかけをつくり、小児看護に対する理解を深める。

4. 成果

今年度は、担当した科目ではおおむね成果をあげることができた。講義内でグループワークを取り入れることができた。

実習、統合実習も同様である。

5. 改善

講義科目では一方的な講義となりやすいため、自分の担当する講義の中で、短時間のグループワークの回数を増やし、講義の構成を工夫していきたい。

6. 教育活動

アドバイザーとして、学習面だけでなく大学生活を楽しんで送ることができるようにサポートしていく。

実習では、国試対策にもつながるように、既存の学習した知識と看護をつなげていくように学習を促していく。

氏名 山本 智子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
小児看護学実習	77	小児看護学実習	78

2. 理念

知識や技術をもとに自ら考え判断し、行動ができるような看護専門職になるよう意識し、教育に携わっている。実習では学生が、社会の中で暮らす小児の健やかな成長・発達の促進に向け、小児とその家族に対する看護の役割を考え、実践できるよう心掛けている。

学生の一人ひとりを尊重し、学生の個性を捉え、個々に合わせた支援を意識している。

3. 方法

実習では、こども園（保育園）と病院（施設）との実習を組み合わせることで、様々な状況にある子どもの成長・発達、健康レベル（障がいのレベル）を、学生が理解することができる方法を取っている。また、実習グループは少人数配置とし、臨地・臨床の実習指導者や教員がいつでも学生のそばで関わられるよう、学生ひとり一人へきめ細やかな対応をし、学生がいつでも相談しやすい環境や雰囲気作りを心掛けている。

実習前は学内演習を実施し、実習に備え、知識・技術・態度の習得をしている。また、カンファレンスを通して、学生の互いの学びを共有したり、実習での経験を言語化することで、自身の思考の整理と共に知識の定着を図り、実習での学びを深めている。

4. 成果

GPA・授業評価は、前回同様、概ね良い評価である。臨床側からサポーター的な関りや、前向きなフィードバックを受け、学生の満足度が高い。実習施設によって、受け持ち患児の重症度や学びが異なるため、学生の実習に対する負担や学びの均一化を図り、課題や実習記録の増減をこちら側で調整した。学生からの平等性に対する意見に対応できたと考える。実習施設によっては、受け持ち患児の選定に苦慮することがあり、その時間の有効活用や、学生の受け持ち体制の検討をする必要がある。

5. 改善

領域内の教員で統一した指導をする。

学生の個々の学修状況をふまえた指導を実施する。

実習場において受け持ち患児の選定に苦慮する際、2人受け持ち制の導入を検討する。

6. 教育活動

アドバイザー活動：履修支援、学修支援、生活支援、その他

氏名 入江 拓
職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
聖隷の理念と歴史	189	看護研究Ⅱ（精神看護学）	4
聖隷の理念と歴史	182	精神看護学概論	156

2. 理念

東京の大学で、言語学を学んでいた大学4年の秋、「聖隷の創設者」長谷川保先生の著書に出会い、本物の聖書信仰と福祉の実践が学びたいと、長谷川保先生に会いに浜松に来ました。保先生から交換条件を出され、その場で、東京での就活や内定を放り出して、それまで看護に興味も関心もなかった私は、本学看護学部に入学することを決めました。本学看護学科を39年前に卒業し、精神科病棟、外科病棟で看護師としての経験を重ねました。

養育里親/専門里親として小さな共同体を営んで33年になります。親の身体疾患・精神疾患や、経済的困窮、死別、虐待、拘留など、様々な事情で実親と暮らすことができない乳幼児から思春期までの複数の子供を、児童相談所からの措置児童として都度家族に受け入れ一緒に暮らしてきています。我が家を巣立った子供たちとの交流はいまだに続いています。

10年前に突然片目を病気で失明し、暗闇の中に突き落とされました。それとちょうど同じ時期にダウン症で生まれ、乳児院に実親の面会もなく長期間置かれた子供と出会い、裁判所の審判を経て、彼を特別養子縁組で実子として家族に迎え入れました。彼の実母も、私と同じく暗闇の中にいたのでしょう。18年共に暮らす重度知的障害の里子や実子も交えて、相変わらず「弱さを抱える共同体」を営んでいるという変な家族です。

精神科の患者さんとの出会い、里親としての子どもたちの出会いと離別を繰り返しながら、弱さと限界を抱える人間同士が「共に生きる」ということの意味について考えながらそのような生活を大切に、悲喜こもごもを重ねてきました。

「キリスト教精神に基づく生命の尊厳と隣人愛」という本学の抽象度の高い「建学の精神」を、すべての担当科目でどのように伝えてゆくか、その方法や機会について、前述の自身の経験も踏まえて試行錯誤を重ねてきました。

建学の精神の神髄に触れれば触れるほど、人から強いられてではなく、自分から人に伝えずにはいられなくなる・・・、建学の精神とはそ本来のようなものだと思います。

2023 年 11 月より自宅を開放して「子ども SOS 静岡」を開設しました。育児が大変なお母さんをサポートする、子どもさんお預かりの無料・無期限のボランティアです。就学前のご兄弟や、医療ケアが必要なお子さん、妊娠相談、子どもも食堂のようなことを始めました。楽しいことばかりではありませんが「共に生きる」とこの実践だと思って、それなりに味わいながらやっております。

ユーザーでもある、様々な理由で社会制度にのりにくい状況の中で、日々の生活を必死で回す人たち（本学の学生さんたちと年齢時にはほとんど変わらない）との出会いを通していろいろなことを想われます。

3. 方法

建学の精神や理念について学生と教員が問いを立て合い、自然に論議するための心理的安全性が担保しやすいという意味で、担当する「聖隷の理念と歴史」や「精神看護学」関連の教授内容、「精神看護学実習」などは、科目としてのアドバンテージが高いと考えています。

大人数のクラスでは、学生の全リアペの内容をカテゴライズし、経年的に蓄積し、それに対する教員のコメントを学生全員に配布、共有することで、各学生たちがお互いに触発し合えるような試みが続けてきました。蓄積されたそれら学生さん達との応答は、膨大な量になりますが、アクティブラーニングの教材そのものとなっています。学生がそれらから触発されるのは、様々な自由な視点への気づきや、そこから得る洞察の面白さと自身のものの見方の変化、そしてそれらによって形作られる、「対人援助職としての人間観」です。

抽象度の高い建学の精神の重要概念である「隣人愛」と「生命の尊厳」については、その概念に依って立つ抽象度を下げた媒体を作成し、様々な場面で「教材」として活用しています。

4. 成果

建学の精神の理解に資すると思われる概念図（私論）に関しては、本学紀要に卒業生である教員と 2018 年～毎年投稿し、講義や実習で運用し、評価を重ねています。それらを通して、抽象度の高い建学の精神の重要概念を、学生は自身の経験に引き寄せて理解し、言語化し、共有するということが不安なく行えるようになってきました。

抽象度を下げたそれらの概念モデルは、特に精神看護学実習での学びの深化と教育方法の改善に活用されており、それらの成果を看護学部教員の共有知とすべく論文執筆を重ねてきており、今年度は看護教員の教育的あり方について学会発表や、ディスカッションの糸口になればと思い、本学紀要にほぼ毎年投稿を重ねています。

また、全学の教員に対しては「全学 F D 研修会」の機会を借りて、私論として発表し、今後も建学の精神を教育的に伝えながら、「建学の精神に基づく教育文化」が醸成できるように試行錯誤を重ねてゆきたいと思っています。

看護学部の各領域を超えた実習科目「聖隷看護基盤実習」「聖隷看護探求実習」では、その概念図を用いて建学の精神を、看護の学びを本格的に学び始める前の 1 年時生が、ほぼすべての看護実習を終えた 4 年次生と、建学の精神についてディスカッションをする機会を設ける仕組みを、新カリキュラムとして立ち上げました。

GPA 等の評価から、いわゆる本業の「精神看護学」科目よりも、建学の精神に関連のある科目に力点を注いでいるのがわかります。建学の精神を掲げる私学のミッションを伝える上では、精神看護学関連科目はそのための「方法」としてアドバンテージが高い授業科目だと思いながらやってきました。

5. 改善

本学の自校教育科目である「聖隷の理念と歴史」や、新カリで2022年度から始まった「聖隷看護基盤実習」と連動させながらの人格的交流を通じた教育的営みは、学生それぞれの卒業後の生き方にあらわれてくるのだろうという思いで、短期の指標に一喜一憂しないように心がけたいと思います。2025年度には「聖隷看護探求実習」が開講され、建学の精神に基づく看護実習科目が完成年度を迎えます。

また、精神看護学関連科目に関しては、年度によって学生集団の特性に違いがみられるものの、GPAや学生による授業評価結果を指標に改善に取り組みたいと思います。

6. 教育活動

私学の存立基盤は「建学の精神」です。

したがって、すべての教育活動はいつもそれを心に留めつつ、具体的な教育方法などの試行錯誤を続けています。

国家試験合格のための教育や訓練は勿論大切なことですが、建学の精神を纏った対人援助職を輩出することが「私学である本学のミッション（使命）」ですから、担当する科目をいかに「手段」としても活用して、建学の精神を伝えるか、その種を学生さんの中に蒔くことができるかに留意しつつ、教育（研究）活動を行っています。

氏名 清水 隆裕

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
精神看護学実習	78	精神看護援助論演習	77
精神看護学実習	78	精神看護援助論演習	78

2. 理念

精神看護学領域の教員です。こころのケアは、まず相手のこころを癒す以前に、「ケア者－患者」という枠組みから「人間－人間」の枠組みに移行する必要があります。そのためには、自分も病人もお互い弱さを抱えた人間であるという自覚が大切です。自分の弱さを認めるには大変な苦悩が伴いますが、それを受け入れることが愛するということであると考えています。

3. 方法

精神看護援助論演習では精神力動論を基礎に授業を行っています。精神看護学実習では、こころのケア以前に患者さんと人間同士で関われることを重視しています。自分が専門職者以前に弱さを抱えた人間であることを安全に受け入れるツールとして視覚教材を開発して用いています。

4. 成果

こころの病は誰もがなりうる可能性があるが、その反面自分と連続線上にあることは実感することは難しい。ただ精神病への関心や精神科看護師になりたい学生が増えているのは実感しています。

5. 改善

精神看護学実習において視覚教材を用いているが、その反応は各学生によってまちまちである。特に、弱さを受け入れることだけが良いことであると捉えられる場合があるため、その点は注意していく伝えていく必要があると考えています。

6. 教育活動

アドバイザー、軽音部サークル顧問、看護学部 SSN チーム（広報活動）担当

氏名 小平 朋江

職位 准教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護統合セミナー（精神看護学）	19	統合実習（精神看護学）	19
精神看護援助論	77	精神看護援助論	78

2. 理念

建学の精神である隣人愛に基づく「ともに生きる」を精神看護学を通して学ぶ。

3. 方法

当事者視点を大切にして「ナラティブ教材」を教育的に活用する。

4. 成果

理念・方法で述べた通り、「ナラティブ教材」の教育的活用は、「ともに生きる」を具現化したものであり、学生と共有しやすい。

5. 改善

「ナラティブ教材」の教育的活用の発展と洗練を続ける。

6. 教育活動

アドバイザーとして個々の学生への支援を行う。

氏名 松本 有希

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数

2. 理念

ケアリングに向かうために、人とつながることや、人と向き合う自己について、学生の皆さんと共に探求する。

3. 方法

- ・精神看護援助論・援助論演習：各semesterで4コマの授業を担当した。その中で、精神疾患のある人の体験しているものは何か、そして、疾患を抱えながら生活する人に対して、看護者としてどのような関わるかを、イメージ化できるように解説することを試みた。
- ・精神看護学実習：精神疾患を抱える人に実際に会い、学生としての在り方や人に関わる自分自身について、学生と共に考え、意味付けする。

4. 成果

- ・授業後のリアクションペーパーや実習後の学生の反応から、学生自身の、ケア者としての在り方を見つめなおす機会が得られたとの反応をもらうことができた。

5. 改善

- ・自己の臨床での体験を踏まえ、看護・ケアリングがより身近にとらえられるような伝え方ができるよう、今後も研鑽していく必要がある。
- ケアリングに関する研究・文献検討等も今後継続的に行っていく。

6. 教育活動

- ・アドバイザー担当学生：15名

氏名 山村 江美子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
家族看護論	156	看護研究Ⅱ（在宅看護学）	4
地域在宅看護学概論Ⅰ	166	地域在宅看護学概論Ⅱ	156

2. 理念

地域在宅看護学概論Ⅰ：1年次生の秋セメスターから、地域在宅看護学について学びます。地域という概念について学び、看護の対象者は、地域で暮らす人々であるということを理解できるように講義をしています。たとえ治療の場で患者さんとして出会ったとしても、地域で暮らす人として捉えるように伝えています。看護実践についても、訪問看護師だけではなく、病棟看護師・退院調整看護師・外来看護師と、地域在宅看護論の視点が求められていますし、実践をしていることを伝えています。地域在宅看護学概論Ⅱ：地域で暮らす対象者の中でも、この概論Ⅱでは、疾病や障害のある対象者とその家族に対する看護支援を考えます。

訪問看護に焦点を当てて、訪問看護の目的・特徴・役割を考えます。

家族看護論：2年次生春セメスター 2年次秋セメスターから開始する領域別看護概論の開始前に、家族看護論を学びます。看護の対象には家族が含まれていることを、概論が始まる前から学修をします。

3. 方法

地域在宅看護学概論Ⅰ：8回の開講科目です。6回は学内の教員による講義、1回は訪問看護師による講義です。1コマは地域を理解するという個人ワークを行い、その後他者との共有の時間を設定します。対象となる患者・療養者・家族を中心として、地域をとらえるワークを行っています。

地域在宅看護学概論Ⅱ：8コマすべてが講義科目になります。在宅看護学領域の4名の教員全員が講義を担当します。1回は本学大学院修了生の在宅看護専門看護師による講義です。

家族看護論：教員4名のオムニバスの講義科目です。成人看護学・小児看護学・精神看護学・地域在宅看護学の教員が、事例を提示しながら、分かりやすく家族も看護の対象であることを講義をしています。

4. 成果

2024 年度は、地域在宅看護学概論Ⅱの授業評価を受けました。

1 年次生の概論Ⅰからのつながりを意識できた内容であったこと、テキストの図表を利用しながらの解説が分かりやすかったこと、医療保険・介護保険についてよくわかっていなかったけど丁寧な解説で理解につながったという意見でした。反面、教員により説明の分かりやすさに差があったこと、授業時間を超えて講義が続けられる状況があったことには改善の意見がありました。来年度は修正をしていきたいと思います。

2024 年度は、概論Ⅰ、概論Ⅱともに訪問看護師をゲストスピーカーとして講義を担当していただきました。DVD 等の視聴教材よりも、実際の看護を学びたいという昨年度の意見から改善をしたものです。

5. 改善

概論Ⅰ・概論Ⅱともに、訪問看護師の講義によって、実際の訪問看護の理解につながったようです。2025 年度は、概論Ⅰ・概論Ⅱともに、在宅看護専門看護師による講義を計画し、広い視野で地域における看護を実践していることを伝えていただく予定です。

6. 教育活動

就職担当として、2025 年度は「就職に向けた社会人基礎力チェック」を本格運用します。看護学部は 2 年次生のキャリアデザインの講義の中で、そして 4 年次生秋 semester ガイダンスで自己チェックをしていただきます。

教務委員として、3 年次生の 2 ブロック制の講義・演習・実習の効果的な教育への支援をしています。

氏名 岩瀬美保

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
地域在宅看護援助論演習（1st）	19	地域在宅看護援助論演習（2nd）	19
地域在宅看護援助論演習（3rd）	20	地域在宅看護援助論演習（4th）	19
地域在宅看護学実習	77	地域在宅看護援助論演習（1st）	19
地域在宅看護援助論演習（2nd）	20	地域在宅看護援助論演習（3rd）	20
地域在宅看護援助論演習（4th）	20	地域在宅看護学実習	79

2. 理念

在宅看護の現場で、療養者と家族の生活全体を捉え、多職種と連携しながら、個別性の高いケアを提供できる看護師を育成することを目指しています。

3. 方法

演習では事例を通し、情報の解釈、看護課題の抽出、優先順位の決定、状況関連図の作成、看護計画を立案します。在宅看護の特徴である「家族」や「環境」により「療養者のつよみ」や「意向」に注目し、療養者を包括的に捉えられるようグループでディスカッションを行い演習をすすめます。ロールプレイ演習を取り入れ、コミュニケーション技法、訪問マナーなど実習に即した演習を行います。実習では訪問看護の実践を通して、療養者、家族とのコミュニケーション技法、シンプルケアへの変換、多職種連携について学びを深めます。多職種連携や協働の実際を知り、継続看護について考え、病院実習とのつながりを意識してもらうような振り返りを実施しています。

4. 成果

演習、実習を通じ、情報収集の方法、アセスメントの必要性、看護課題の抽出や優先順位の決定方法など、在宅看護の特徴に対する理解が深まった。

学生が主体的にアセスメントを行うようになった。

5. 改善

他領域と違い複数療養者の情報収集が必要となるため、今後は実習記録方法を検討していく必要があると感じている。実習施設と連携し、学生が安心して実習できる環境を作っていく。

6. 教育活動

アドバイザー活動（15人）

氏名 江口 晶子

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
看護研究Ⅱ（公衆衛生看護学）	2	看護統合セミナー（公衆衛生看護学）	16
統合実習（公衆衛生看護学）	16	公衆衛生看護技術論	69
公衆衛生看護学概論	166	公衆衛生看護活動論演習	65
公衆衛生看護総合演習	74	公衆衛生看護管理論	74

2. 理念

私の教育理念は、公衆衛生看護の視点をもって看護の意味やあり方を考えることができる看護職者を育てたいというものである。地域間、個人間の健康格差の拡大、人々の健康管理の方法や保健行動の様式の変化など、社会の変化に合わせ、人々の健康課題を根拠に基づいて予測、明確化し、人々と環境に働きかける活動展開の基礎となる知識や思考力、実践力を教授したいと考えている。保健師という仕事のやりがいを自身の経験もふまえて伝えていきたい。

3. 方法

公衆衛生看護学概論では、理論などの知識を学ぶ際も学生の生活経験と結びつけて考えることができるよう、Google Form 等を利用した授業内アンケートを実施する等の工夫をした。公衆衛生看護技術論では、可視化の難しい保健師の技術をイメージ化できるよう、ロールプレイングを導入した。また、知識を整理しながら学修できるよう、PPの資料だけでなく要点をまとめた配布資料を作成した他、毎回、知識の定着を確認するための小テストを実施した。公衆衛生看護活動論演習では、学生が主体的かつスムーズに個人ワークに取り組むことができるよう各種統計情報サイトとリンクさせた「地域診断演習ノート」を作成した。また、情報の統合にラベルワークの手法を取り入れた他、地区視診のまとめにフォトボイスの手法を取り入れた。

4. 成果

講義科目では、授業内容についての一定の理解を図ることはできたと考えるが、学生が主体的に考える時間が相対的に少なかった。また、学生の気づきを全体に共有し学びを深めるような働きかけが十分でなかった。演習科目では、教員一人あたりが担当するグループ数が多く、適切なタイミングでの助言ができたとは言えない。また、教員間での打合せが十分だったと言い難く、指示や助言の一

貫性に欠ける部分があったと考える。学修効果を高めるため、新たな手法を取り入れながら進めているが、成果の検証が不十分である点も課題と言える。

5. 改善

講義科目では、授業毎のリアクションペーパーの確認を十分に行い、より学生のレディネスや受け止めをふまえた内容にしていく。事例を取り入れ、学生間のバズセッションの時間をより多く設けることで、学生が能動的に考えられるような構成にしていく。演習科目では、ワークの進め方や到達点をあらかじめイメージできるよう、具体的でわかりやすい説明を心がける。合わせて、担当教員間での事前の打合せも十分に行うようにする。また、演習科目における学修成果の可視化、検証に取り組むたいと考える。

6. 教育活動

アドバイザーにとって身近で安心できる存在になれるよう心がけたい。保健師課程においては、1年生が自ら十分に考え履修を検討できるようわかりやすいガイダンスに努める。保健師としての就職を検討している学生には、2～3年次から定期的な面談を行い、十分な準備を行い安心して採用試験に臨めるよう支援していきたい。

氏名 長山 ひかる

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
公衆衛生看護学実習	74	公衆衛生看護技術論演習	69

2. 理念

私が、講義をする中で大切にしていることは、講義で得た知識を臨地実習の現場で結びつけができるような内容とすることである。学生が講義、演習に参加して、保健師の仕事に少しでも興味を持ち保健師になりたいと実感できることを心掛けている。実習指導については、授業での学びと実習で実施したことの関連させるように意識して関わるように心がけている。

3. 方法

公衆衛生看護技術論演習では、2年生春semesterでの公衆衛生看護技術論で学んだ知識を実際に健康教育や家庭訪問などの演習を実施していき学びを深めていくようにする。乳幼児の身体計測について映像での事前学習できるようにした。

4. 成果

保健指導や健康教育の集団を対象とした看護活動を実際に演習することで、授業への関心、興味が引き出せた。

5. 改善

乳幼児の家庭訪問の事例についての家庭訪問計画の立案の演習が、小児看護学、母性看護学の学びがまだ浅い中で実施するため事例について検討が必要である。

6. 教育活動

アドバイザーの面接の実施、保健師就職希望者への就職支援の面談、看護師、保健師国家試験の学習の支援の面談を実施した。

氏名 遠山 大成

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
公衆衛生情報処理演習	69	公衆衛生看護学実習Ⅰ	167

2. 理念

保健師の役割や専門性、魅力伝わるように演習、実習等で学生さんと関われたらと思います。
学内で理解した保健師の思考過程や知識や、学習した技術が演習の課題や実習での活用につながる様と考えています。

3. 方法

公衆衛生看護学実習Ⅰでは、サロン参加、地域診断を通して地域での生活や自助互助を学ぶ。
公衆衛生看護情報処理演習ではデータ分析の方法を学び、公衆衛生看護学実習Ⅱでデータ分析を実践する。

4. 成果

公衆衛生看護情報処理演習では保健師がデータを扱う意義や技術について理解、学習することができ、履修者の全員がエクセルでのデータ分析を実施することができた。

5. 改善

講義構成や様式の改善など演習、実習内容が効果的学習できるようにさらにブラッシュアップをしていく。

6. 教育活動

氏名 長峰 伸治

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
心理学	119	生涯発達心理学（Aclass）	83
生涯発達心理学（Bclass）	82	学校体験活動	20
養護実習Ⅰ	13	養護実習Ⅱ（2021年度入学生）	13
養護実習Ⅱ（2022年度入学生）	9	心理学	34
教育心理学	31	教育相談の理論と方法	19
生涯発達心理学	21		

2. 理念

心理学の科目（看護学部、教職課程、教養科目）を担当しています。

対人援助職に就こうとしている学生の皆さんに「人間の心」や「自分や他人を理解すること」に興味・関心を持ってもらいたい、また、講義内容を自分や身の回りの人達に照らし合わせて理解してもらいたい、と思って授業をしています。

仕事に限らず、今後歩んでいく人生のところどころで、心理学の知識が皆さんに役に立ってもらえれば、と思います。

3. 方法

大人数の一斉講義を行うことが多いのですが、スライドと手元の資料、視聴覚教材を基に、できるだけ一方的にならないように、考えるワークを入れたり、クリッカー機能を使って設問に答えてもらったりしています。

少人数の科目では、実際にロールプレイをしたり、グループで事例検討をしてもらったりして、アクティブラーニングを心掛けています。

4. 成果

授業評価では、全体として比較的肯定的な評価をしていただけていますが、授業中居眠りをしている人や、受け身的に受講している様子を見かけますので、もっと興味・関心をもって、積極的に受講できるような授業内容・構成を心掛けたいと思います。

5. 改善

受け身的な受講にならないよう、大人数の講義でも、こちらが一方的に話し続けるのではなく、質問をして考えたり、答えてもらったり、近くの席の人と話してもらったりする機会を多くしようと思っています。

6. 教育活動

養護教諭課程領域長、学生委員長

氏名 安田 智洋

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
健康スポーツ論	69	健康スポーツ実践	28
スポーツ I (月 1)	33	スポーツ I (火 1)	38
看護研究 II（教養・専門基礎領域）	1	健康スポーツ論	27
健康スポーツ実践	15	スポーツ I (月 4)	16
スポーツ I (火 1)	28	健康長寿と運動	11

2. 理念

隣人愛の精神に基づき、自分だけでなく他者との交流、他者への支援を考えること

3. 方法

実技では、他者への思いやりを意識し、ともに成長することを心がけるようにしました。講義では、自分の健康やスポーツの知識を高めることだけでなく、その内容を身近な方々にも伝え、健康やスポーツを皆で享受できるようにしました。

4. 成果

実技では、皆が楽しみながら他者とのコミュニケーションや全体で技術のレベルアップを行うことができました。講義では、知識を高め、自身の家族などに伝えることも積極的にできていました。

5. 改善

WebClass をさらに活用した授業スタイルを心がけたいと思います。

6. 教育活動

学生たちが自主的に授業に取り組むことも多くなり、受講生全体の GPA が高くなったことを実感いたしました。今後も、できるだけ学生たちの主体性を尊重した授業スタイルを心がけるようにします。

氏名 熊澤 武志

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
生物学	83	生理学Ⅰ（Aclass）	84
生理学Ⅰ（Bclass）	83	生物学	11
生命科学	8	医療法学	10
生理学Ⅱ（Aclass）	83	生理学Ⅱ（Bclass）	83
栄養生化学（Aclass）	83	栄養生化学（Bclass）	83

2. 理念

生理学・生化学関連科目（生理学Ⅰ・Ⅱ、栄養生化学、生命科学、生物学）では、ヒトの生命現象について初めて聞く用語や概念を理解しなければならない場面が多くある。また、既に持っている知識をさらに深める内容も少なくない。そのため、授業では学生が向上心を保ち、学ぶ目的を見失わないよう、常に丁寧な説明を重視している。「なぜこの知識が必要なのか」「なぜ今この科目を学ぶのか」が理解できるように、教科書だけでなく配布資料やスライドも活用しながら、内容を丁寧に解説している。こうした工夫を通じて、学生がそれぞれの科目を学ぶ意義を実感し、自身の目標をより明確にできるようサポートしている。

一方、医療法学では、「なぜ看護に法律の知識が必要なのか」「なぜ今それを学ぶのか」という疑問に対し、具体的な法律事例を紹介しながら理解を促している。将来、医療従事者として働く上で不可欠な法的知識に、自然に親しんでいけるような学修環境を提供している。

3. 方法

担当するすべての科目において、自作の配布資料を準備するとともに、授業では教科書やスライドを活用し、事前学修・事後学修に役立てるよう工夫している。また、授業内容を視覚的に理解しやすくすることで、学生の理解を深められるよう努めている。必修科目である「生理学」および「栄養生化学」、選択科目である「生命科学」と「生物学」では、小テストや整理問題などを取り入れ、学修内容の定着を図る仕組みを整えている。さらに「医療法学」では、実務経験を有する5名の教員（うち4名は学外講師）によるオムニバス形式の授業を実施し、臨場感と興味を同時に感じられるような授業を展開している。加えて、WebClassを活用したリアクションペーパーの提出を通して、学生自身が授業内容を振り返る機会を設けている。

4. 成果

生理学・生化学関連の科目では、配布資料や小テスト、整理問題が、学生の事前・事後学修に役立つものとして高く評価された。また、医療法学では、「難しいと感じていた法律の授業がとても理解しやすかった」との声が多く寄せられた。さらに「より多くの学生に履修してほしい」といった感想もあり、授業評価では平均 3.88 という高得点が得られた。

5. 改善

生理学・生化学関連の科目では、80 分の授業を学生の理解度に合わせて柔軟に進めるよう工夫した。また「生理学」や「栄養生化学」では、グループワークなどアクティブラーニングの要素を取り入れ、学修効果の向上を図った。さらに、小テストの模範解答はその日のうちに WebClass に掲載するようにし、学生が復習しやすくなるよう改善を図った。

6. 教育活動

ハンドベルサークルの顧問を担当している。

氏名 西川 浩昭

職位 教授

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
保健医療行政論	157	公衆衛生学（Aclass）	83
公衆衛生学（Bclass）	82	統計学・疫学概論	17
疫学	96	公衆衛生学	56

2. 理念

内容や数値の変化が多い科目を担当しているので、なるべく最新の情報を提供する様に心がけている

3. 方法

授業内容に沿った配布資料を作成し、スライドに示した内容の要点を提供して、スライドの内容を書き写す必要が無いように配慮している

4. 成果

成績はほぼ横ばいであるが、重要な点については、身につけることが出来ていると感じている。

5. 改善

復習が重要と考えており、何をすれば良いか判らない学生が少なくないので、重要な点を問題形式で提示し、解答することで復習できるようにしている。

6. 教育活動

岩瀬助教とともに看護学部の 18 グループのアドバイザーを担当している

氏名 隆 朋也

職位 講師

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
情報処理(月 5・隆)	59	情報処理(月 6・隆)	25
情報処理(火 1・隆)	50	基礎演習	165
保健統計学	157	データサイエンス入門(看護 A①)	41
データサイエンス入門(看護 B①)	42	データサイエンス入門(SW)	55
データサイエンス入門(EC)	42	データサイエンス入門(OT)	41

2. 理念

なるべくわかりやすく、出来るだけ正確に、を心がけています。

3. 方法

毎回の授業でリアクションペーパーに入力された理解度や関心度を確認し、次回授業の難易度設定や授業の展開方法に反映させています。

4. 成果

授業評価アンケートでは、おおむね良好な結果が得られていると受け止めています。

5. 改善

リアクションペーパーに関する全体へのフィードバックがまだまだ不足していると感じています。なるべく授業内に時間を確保して伝えるよう取り組みます。

6. 教育活動

氏名 渥美 陽子

職位 助教

1. 教育の責任（科目責任者として担当する科目）

科目名	受講者数	科目名	受講者数
英語Ⅰ(月5)	32	英語Ⅰ(月6)	27
英語Ⅰ(火1)	26	英語Ⅲ（看護英語）	31
国際看護研修	6	入門リハビリテーション英語（英語Ⅲ）(OT)	23
英語Ⅱ(月5)	28	英語Ⅱ(月6)	26
英語Ⅳ(月3)	26	国際看護研修	6
入門リハビリテーション英語（英語Ⅲ）(PTのB)	24		

2. 理念

私の教育理念は、全ての学生が英語を学ぶ楽しさを体験し、異文化コミュニケーションの基礎スキルを身につけられるように支援することです。英語は単なる言語スキルではなく、学生たちが国際的な視野を持ち、国内外の仲間と共に活躍するためには欠かせないツールであると考えています。英語学習を通して自分自身、および他者の文化に対する感受性を高め、豊かな人間性を育てて欲しいと思っています。看護、リハビリテーション、社会福祉、国際教育といった多様な学部の学生に対して、1年次生には一般英語、2年次生以上にはそれぞれの専門分野に応じた英語教育を提供しています。日々の英語学習習慣の構築と継続を支援しつつ、実際の現場で役立つ英語力を養うことを目指しています。

3. 方法

学生が主体的に学び、実践的な英語力を習得できるよう、以下の教育方法を取り入れています。

(1)アクティビティとタスク：授業ではペアワークやグループワークなど、コミュニケーションの多いアクティビティを積極的に導入し、学生たちが英語で自分の考えを伝え、相手を理解する力を養っています。

(2)異文化コミュニケーション：異文化コミュニケーションの基礎スキルを学ぶために、様々な文化背景を持つ人々との交流機会を提供しています。具体的には、研修生来学時のインタビュー課題（ペアで実施）や、季節の行事に関連した活動などを実施しています。

(3)発音練習：英語の音を大切にしています。カタカナ英語ではなく、相手に伝わる、クリアでスムーズな発音の習得を目指し、繰り返し練習を行っています。自分で言える音は聞き取れるようになるため、リスニング力の向上にも繋がっています。

(4)対話スキルの練習：2年次生以上の授業「英語Ⅲ、Ⅳ」では、専門分野ごとに臨床での対話スキルを重視し、専門分野に必要な語彙や表現の基礎を学びながら、異なる文化を持つ患者への配慮も身につけます。

(5)英語でのプレゼンテーション：授業の後半では、グループごとにテーマを選んで学びを深め、その成果を英語で発表する機会を設けています。「英語Ⅳ」では、グループワークでリサーチプロジェクトに取り組み、グループ発表を行います。

(6)国際医療福祉教育プログラム（副専攻）：2022年度から開始されたこのプログラムでは、看護の学びに加えて国際看護、支援、ボランティア、英語での演習などを学ぶことができます。

4. 成果

これまでの授業を通じて、多くの学生が英語を学ぶ楽しさを知って自信を持つようになり、積極的に英語を使う姿勢が見られています。国際交流との連携も進み、全ての学生が、一度は海外の研修生と直接英語で話す機会を持つことができました。特に、発音練習の効果は顕著で、学生たちはよりクリアな発音を身につけ、リスニング力も向上しています。「国際看護研修」に参加した学生たちは、現地でのコミュニケーションに積極的にチャレンジし、豊かな学びの体験を得ています。授業と国際交流を通して「看護英語」の重要性を実感し、「英語を使って看護を学ぶ」ことに積極的になっています。多くの学生が「看護ケアを英語でも患者さんに提供したい！」という思いを抱くようになりました。看護英語と国際教育での経験は、学生にとって生涯の宝物となると考えています。2024年度は2名の学生が自身の国際交流経験を基に、日本看護英語教育学会（JANET）でポスター発表を行いました。

5. 改善

今後の改善点としては、オンラインリソースやデジタルツールの活用をさらに進め、AIも活用して学生が自主的に学習できる環境を整えたいと考えています。また、採点事務等の業務については効率化を進め、個別指導の時間を確保し、学生一人ひとりのニーズに応じたサポートを強化する予定です。学生の成長を可視化する仕組みづくりも、今後の課題です。

6. 教育活動

学生の学びを深め、国際的な視野を広げるために、以下のような教育活動を実施しています。

(1)海外研修/研修の事前研修：海外研修に参加する学生向けに、英語での看護シミュレーション演習などを含む事前研修を実施し、現地での実践に備え、学生の自信と準備度を高めています。

(2)研修生受入れ時の支援：提携校からの研修生を受け入れる際に、通訳・翻訳の担当や学生間の交流を促進する支援を行い、異文化理解を深め、国際交流の場を提供しています。2024度も、SMU研修生へのインタビューを授業の一環で実施しました。また、副専攻の学生がホストとして市内観光を企画し、日本文化を紹介しました。

(3)学会参加支援：学生が積極的に学会などの学術的な場に参加できるように、発表準備の支援を行い、学生の専門知識の向上や学術的な交流を促進しています。

(4)副専攻学生向け英語ワークショップ：副専攻学生に向けて、定期的な英語ワークショップを開催し、国際的な視野を広げ、英語コミュニケーション能力を向上させるための支援を行っています。